



日中友好の歴史探訪

梅屋庄吉と孫文

辛亥革命の指導者として清朝の皇帝支配を打ち破った革命家・孫文。「建国の父」孫文の活動の舞台裏を支えた人々の中には日本人の存在があった。彼の名は梅屋庄吉（1868～1934）。日本映画界の風雲児と呼ばれた日本活動映画株式会社（日活）の創設者である。

明治維新の風雲児

梅屋庄吉が生まれたのは明治元年の長崎。長く続いた江戸幕府の封建制度が終焉し、新たな時代の幕開けとなった年だ。庄吉は生まれて間もなく貿易業と精米所を営む梅屋商店の養子となった。梅屋商店の借家には三菱財閥の創始者・岩崎弥太郎が暮らしていて、幼い庄吉は岩崎弥太郎にかわいがられたという。

世界に開かれた長崎という地で、好奇心旺盛な少年は時代の空気を鋭敏に嗅ぎとっていた。海外雄飛の志を抱いた庄吉は、親の猛反対を押し切り、14歳にして上海に密航する。中国最大の国際都市・上海で庄吉が見たものは、欧米人から屈辱的な扱いを受ける中国人の姿だった。ここで庄吉は「日本人の友人であり、兄弟である中国がこんな状態であってはならない」とい



梅屋庄吉・トク夫妻と孫文（中央） 写真撮影当時、孫文は日本に亡命していた

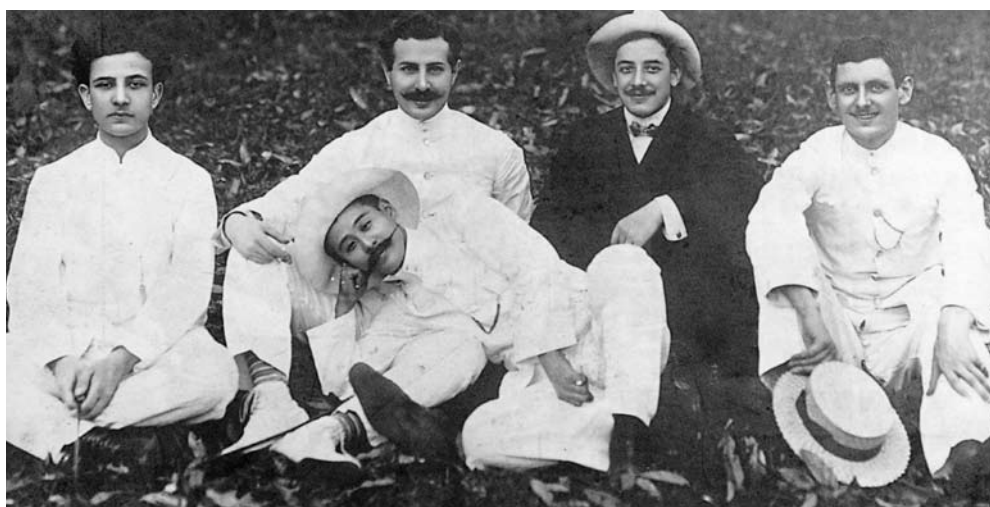
君は兵を挙げたまえ。
 我は財を挙げて支援す



10歳の頃の梅屋庄吉 幼少時から正義感が強く、好奇心旺盛な庄吉には数々のエピソードがある。小学校を卒業すると大阪屋京都を放浪し、また、地元の暴れ者に決闘を挑んだりと数々の武勇伝を残した



若き日の孫文 医師を目指して勉学に励む一方で、友人と革命を論じた。医師をしながら革命団体の組織作りに奔走。写真は1895年ハワイで革命団体「興中会」を組織した後、帰国したときのもの



マニラ時代の梅屋宗吉(中央) 庄吉は香港時代にフィリピン革命派の指導者で亡命中のエミリオ・アギナルドらとの親交も深めた。1898年、アギナルドはフィリピンのスペインからの解放を実現し、独立を宣言した

う思いを抱くに至った。

一方、孫文は梅屋庄吉誕生の2年前に広東省香山県(現・中山市)の貧しい農家で生まれた。13歳でハワイに移民として渡った彼はキリスト教と民主主義の精神に触れ、16歳で帰国する。そこで孫文が見たものは、列強に蹂躪される故国の悲惨な姿であった。清朝は自己の保身に走り、民衆を見捨てていた。医師を目指していた孫文は国を救うのは革命しかないと思いついた。

盟友との邂逅

梅屋庄吉と孫文との出会いは、日清戦争末期の1885年のことであった。庄吉が香港で営む写真館を訪れた孫文は、庄吉に中国の未来について熱く語った。かねてからアジアの列強からの独立を支援していた庄吉は、アジア初の共和国樹立のため生涯を捧げた孫文を助けることを決意し、「君は兵を挙げよ、我は財を挙げて支援す」と生涯変わらぬ革命への支援を約束した。こうして二人の革命が幕を開けたのである。

辛亥革命

革命を志した孫文を待っていたのは、度重なる挫折と裏切り、武装蜂起



孫文の妻・宋慶齡 宋慶齡（1893唐1981）は中国の実業家の次女として生まれた。アメリカに留学後、1914年に東京に亡命中の孫文の秘書となった。翌年に二人は結婚。この時期、梅屋庄吉夫妻から公私にわたって世話を受ける。革命運動を再開させるために孫文とともに帰国。孫文の死後も孫文思想の啓蒙に努めた



梅屋庄吉とトク 庄吉の妻トク（1875唐1947）は長崎県・生きの生まれ。庄吉と同様に人情に厚く、弱い者を放っておけない性格だった。革命の支援に巨額の資金を費やす庄吉をしっかりと支え、孫文と宋慶齡の結婚にも尽力した



孫文の書 孫文が庄吉に贈った書「同仁」。親しくとも、そうでなくとも、同じように広く、兵藤に愛するという意味。「一視同仁」とも。孫文が好んで使った言葉である

の失敗、終わりになき亡命生活であった。しかし、あらゆる困難を乗り越え、孫文は革命の理想にむかって走った。

庄吉は孫文との約束を履行するために写真館を捨て、映画制作の技術を学び、それをもって帰国した。映画興行で大きな成功を収めた梅屋庄吉は、映画産業で築いた富を惜しげもなく孫文の革命工作に注いでいく。こうして1911年、辛亥革命が起こり、清朝は270年の歴史の幕を閉じる。

挫折を乗り越えて

孫文は1911年に臨時大統領に就任したが、革命政府の内部対立や列強の干渉で混乱はなおも続いた。翌年には強力な軍事力を誇る袁世凱による革命派への弾圧が始まり、孫文は再び亡命者の身となる。第二革命に失敗した孫文を日本に招いたのも梅屋庄吉であった。

庄吉の支援によって武器を蓄え、飛行隊までも組織した孫文の革命軍は、1915年、第三革命に立ち上がる。翌年には大統領・袁世凱が死去し、孫文は、辛亥革命から8年で中国国民党の総理となる。

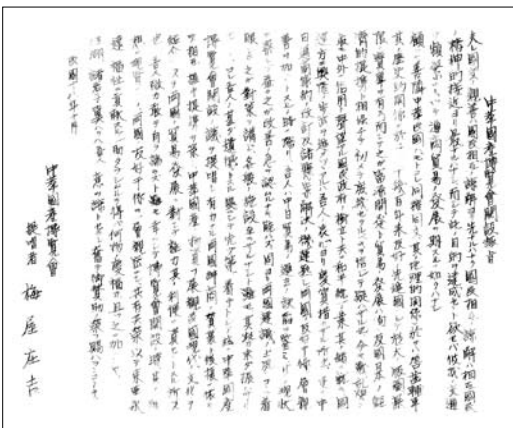
人間は世界兄弟主義に育てられた文化の境に至れば 偏見のなくなる日の来る事と信ずる



東京・日本橋の篠原彫金店前で孫文像とともに 庄吉は孫文像の製造を当時一流の銅像製造業者だった篠原彫金店に依頼



孫文・宋慶齡最後の写真 孫文死去の1か月前に撮影されたもの。病床にあって民族平等のための団結を訴え続けた



中華國産博覧会開設趣旨 庄吉は中国の発展のために中国での万博開催を希求していた。庄吉の夢が上海で花開く

庄吉愛用の羽織 裏地に書かれた「賢母」という文字は孫文が書いたもの。建国の父が孫文なら、母こそ庄吉であるという気持ちがかめられているという



革命未だ成らず

1924年「余の力を中国革命に費やすこと40年余、その目的は大アジア主義に基づく中国の自由と平等と平和を求むるにあつた。(中略) 民衆相互の信頼をもとに西洋の覇道に対するアジアの王道の優越性を強く唱え続けることが肝要である。しかしながら、なお現在、革命は、未だ成功していない。(中略) 目的の貫徹に向け、誠心誠意努めていかねばならない」との演説を残した孫文は翌年に死去する。

香港での出会いから30年。孫文の革命を支え続けた庄吉にとって、その死は筆舌に尽くしがたい衝撃であった。

1931年に満州事変が勃発すると日中関係は急速に悪化する。これを憂慮した庄吉は、孫文の志を胸に日本政府への平和工作を計画する。そして、政府首脳と会う予定で出立したその日、汽車を待つホームで昏倒し、そのまま二度と立ち上がることはできなかった。

「革命の恩人 梅屋庄吉逝く」「惜しまるる志士・梅屋翁」。新聞は、庄吉の偉業をこぞ取り上げ、その死を惜しんだ。

【資料】小坂文乃著 『革命をプロデュースした日本人』 講談社